全国聾学校合奏コンクール

３０周年記念誌

世界に一つだけの楽譜

公益財団法人
聴覚障害者教育福祉協会

序

公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会
会　長　　山　東　昭　子

平成元年度から始めた全国聾学校合奏コンクールは、本年で第３０回目の節目を迎えました。聴覚障害児にとって音楽教育は困難度が高い分野であります。それだけに一層の指導の工夫が必要です。この合奏コンクールは楽器による演奏で全国聾学校における音楽教育の充実向上を図るとともに、音楽を通して豊かな情操を育てることを目的として企画し、開催してまいりました。

歴代の審査委員の先生方は、永年にわたる真摯な審査、懇切な助言・講評により、各学校で指導に当たられた先生方そして子どもたちを励まし続けてくださいました。本合奏コンクール事業発展の原動力となっています。第一回から、第三十回を迎えた本年も引き続き審査委員をお務めくださっている田中一嘉先生を始め、歴代の審査委員に深く感謝申し上げます。

聞くところによると、初回から第十一回までは、審査委員が第二次審査対象校に赴いて実地審査を行っていましたが、第十二回からは現在と同じく第一次・第二次ともに各校から送付されてくる演奏録音ビデオ又は DVD による審査を実施しております。表彰式に関しましても第十一回までは入選校の代表者を、東京・虎ノ門の国立教育会館に招待して行っていましたが、第十二回以降は協会会長や代表者が文部科学大臣賞受賞校に赴いて行うようになっています。

第三十回の節目のコンクール開催に当たり、何か記念になる事業を行おうということになり、記念誌を発行することにしました。このコンクールに応募することをきっかけとして各校で演奏に取り組み、それぞれの学校でご指導に当たられた先生方の様々な苦労話しや思いなどを書いていただきました。また、以前の審査委員の先生方や現在の先生方にもお書き頂きました。これらのそれぞれの方々の思いがしっかりと繋がり、この全国聾学校合奏コンクールが今後もますます充実発展していきますよう、またこの事業を通して聴覚障害教育の一層の充実・発展・振興が図れますよう祈念して序といたします。

目　次

序　山東　昭子

《全国聾学校合奏コンクールの始まりの頃からの道のり》
鼎談　… 1
尾高 惇忠（元・審査委員長）
田中 一嘉（前・審査委員長）
尾崎 正峰（現・審査委員長）

《審査員として感じたこと》
「世界に一つだけの楽譜～「その子その子」のための
パート譜がもたらす音楽の至福」　尾崎　正峰　… 6
「全国聾学校合奏コンクール・第30回を迎えて思うこと」　田中　一嘉　… 8
「煌く瞳が奏でる音楽の未来」　目黒　一則　… 9
「コンクールに接して」　草間みどり　… 10

《特別寄稿－あの日あの頃を思い起こせば》
「合奏コンクールに思うこと」　林　茂和　… 11
「第１回から第26回までの変遷と思い出」　田村　隆　… 12
「コンクールから学んだ子どもの可能性」　渡邉　哲夫　… 13

《コンクールに寄せる各校の思いと願い》
八戸校　「八戸聾学校と合奏コンクール」　大嶌　範子　… 14
盛岡校　「合奏コンクールを通しての
成長と喜び」　斎藤　麻子　… 15
福島校　「３０周年記念誌に寄せて」　鈴木由里子　… 16
福島・平校　「心を合わせて」　白土かおり　… 17
福島・会津校　「気持ちを合わせて」　五十嵐早苗　… 18
水戸校　「音と心のハーモニー」　蜷原けい子　… 19
大塚校　「みんなの心を一つに」　本田　章江　… 20
葛飾校　「３０周年に寄せて」　赤司　郁子　… 21
都立中央校　「目標と自信をもてた、
合奏コンクール」　佐々木恵子　… 22
静岡校　「この一叩きに熱を込めて」　山根　渉　… 23
一宮校　「音楽と生徒との懸け橋に」　福田　和枝　… 24
京都校　「合奏コンクールを通して」　伯耆　初予　… 25
大阪中央校　「打ち鳴らせ！ 心に響け！」　近友　順子　… 26
岡山校　「音と音がピタリと重なったとき」　角田　直也　… 27
香川校　「３０周年記念誌に寄せて」　西岡真由美　… 28
福岡校　「心を一つにして」　吉村　恵子　… 29

《編集後記》　櫻井　博　… 30

全国聾学校合奏コンクール　学校別入賞一覧(金賞、銀賞、銅賞、努力賞、審査員奨励賞)

回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
札幌		努							努	銀	努						奨												○	
函館																														
旭川							銅	努			努	努	努	銅	銅	努	努													
室蘭																	努	奨												
帯広																														
高等																														
釧路鶴野																														
青森																						奨								
八戸		努																				努	銀	金	銀			努		
弘前	銀	銀	銀			銀							努																	
盛岡						銅	金(中) 努(小)	金	金	努								奨	努	奨	努			努	奨	奨				○
一関清明						努						努		努																
宮城																														
宮城小牛田															奨	努	奨	努	奨	奨	奨									
秋田																														
山形																														
酒田																														
福島																								奨	金	努			奨	奨
福島分校																													○	○
福島平分校																					奨	奨			奨	奨	奨		○	○
福島会津分校																										努	奨	銅	○	○
水戸																							奨						○	
霞ケ浦																	奨					奨	銅	努	奨					
栃木																														
群馬			努															奨												
大宮																														
坂戸																														
千葉	金	金	金	金	金			銀																						
筑波大附属																											銅	努・努	努・奨	努・奨
大塚																										奨	銀	銀・努	金・銀	金・努
品川															奨															
立川																			奨	努		努	努							
葛飾																									努	努	努			
中央																				奨		銅							奨	奨
日聾																														
平塚																													奨	
横浜市立																														
川崎																														
横須賀市立																														
新潟																														
長岡																														
長岡高田分校																														
山梨																														
石川																								奨						
福井																														
富山																														
高岡																														
長野																							奨							
松本							努																							
岐阜																														
静岡																								奨		奨			努	銀
沼津																														
浜松																														
名古屋			努	銅	努								銀	努	努	銀	金													
千種																														
岡崎																														
豊橋			銅	銀					努	金	銀	銀	銅	努	金	努	銀	努	銅	銅										
一宮																奨	奨			努	銅	金・奨(B)	奨	努			努	奨・奨	○	努
三重																														
滋賀																														
京都																													奨	○
京都舞鶴分校																														
大阪中央																													○	○
生野				努	銀	努	銀		銅							銅		金	銀	銀		奨		銀	努	銀	努	金	○	銅
堺																														
だいせん																													○	
神戸																														
姫路																														
豊岡																														
あわじ																														
こばと															奨															
奈良																	奨	奨												
和歌山																														
鳥取																														
鳥取ひまわり分校																														
松江																					奨									
浜田																														
岡山																													○	
広島南																														
広島南呉分校																														
尾道																													棄権	○
(山口)下関南															銀	金		銀	金	努										
山口南				努				努							努	奨		努	努	金	銀								○	○
徳島	銅																													
香川		銅			銅	金				努	銅	金(中) 銅(小)	金	銀(中)		奨	銅	銅(中高) 努(小)	奨(中) 奨(小)		金(中) 努(小)	銀	金	銅	努	銅	奨	努	努	努
松山																														
宇和					努			銅	銀	銅	金																			
高知																														
福岡																							奨		銅	奨			奨	奨
久留米																														
小倉												努	努	金	奨															
福岡高等																														
直方																													○	○
佐賀																														
長崎																			努											
長崎佐世保分校																														
熊本																														
大分																														
都城さくら																							努	奨		奨				
延岡しろやま																														
鹿児島																										金	金	奨		
沖縄																								努	奨					

鼎談：全国聾学校合奏コンクールの始まりの頃からの道のり

（2019年2月25日　於：尾高惇忠先生のご自宅にて）

出席者

尾高 惇忠（元・審査委員長、作曲家、東京芸術大学名誉教授）
田中 一嘉（前・審査委員長、指揮者）
尾崎 正峰（現・審査委員長、一橋大学大学院教授）

尾崎:聴覚障害合奏コンクールが30周年を迎えましたが、開始当初から審査委員、そして審査委員長として長く関わってこられました尾高惇忠先生、田中一嘉先生にいろいろお話をしていただければと思っております。現在、私が審査委員長を務めさせていただいておりますが、審査委員となってから日が浅いもので、コンクールが始まった頃の思い出を含めて興味深いお話が伺えるものと楽しみにしております。

＜審査委員になったいきさつ＞

尾崎：尾高先生にコンクールの審査委員長にとの白羽の矢を立てる（笑）わけですが、どのような経緯があったのでしょうか。
田中：審査委員長をお願いする前のことですが、私の父が養護学校の校長を務めていたとき、校歌を作るに当たってどなたがいいかという相談を受け、私が桐朋音楽大学で指揮者の尾高忠明さんに師事していたので、お兄様の惇忠先生に「ダメ元で、恐る恐る」（笑）お願いしましたところ快諾していただきました。
尾高：僕は校歌を頼まれることはあまりなかったんです。池内友次郎先生のように校歌の作曲をよく頼まれる作曲家もいるけれども、僕はそれからもそれほど作っていませんね。
尾崎：その後、コンクールが始まり、尾高先生に審査委員長をお願いすることになるわけですね。
田中：校歌作曲のお願いをしてからしばらく期間はあったと思いますが、“2度目のお願い”をしまして、これも引き受けていただきました。
尾崎：私の場合は、尾高先生がお辞めになるということで代わりに誰かをという話になったとき田中先生からお電話をいただいたのですが、その時は「私は音楽が専門ではないので尾高先生の後任ということでは荷が重すぎます」とお断りしました。ただ、それで引き下がってはいただけず（笑）、あらためて「音楽以外の専門の方が審査に加わっていただくことも大事だと考えるので」との旨、説得をされまして、力不足とは思いつつもお引き受けしました。

＜コンクールの始まりの頃＞

尾崎：尾高先生は委員長をお引き受けになって、どのようなことをお感じなられましたか。
尾高：審査をするといっても、何を基準として、どう評価したらいいのか、しょっちゅう悩んでいましたね。
田中：「基準」という点ではそうですね。年齢構成は小学生から高校生までいろいろですし、楽器編成、演奏曲のジャンルなど、言葉は悪いですが、すべてがバラ

バラですから。
尾高：何より、音を聴くことが不自由な彼らが合奏する。それを我々が勝手に評価するのははばかられると躊躇しましたね。それでも、指導する先生方などから伺ってみると、彼らが演奏することで振動を感じる、あるいは、振動で感じる、そして、音楽をしていることで元気になるということを言われて、なるほどと思ったのがまず始まりですね。
田中：実際の演奏を聴いたり、DVDを視聴してみたりすると、子どもたちはお互いに聴くということがすごく難しいということを感じますね。
尾高：「合奏は聴くことだ」ということと矛盾するんだよね。田中さんがオーケストラをとりまとめるために音のバランスをどうするのかということと比べても、はるかにたいへんだろうと思うね。どういうふうに指導されていたのでしょうかね。
尾崎：今回の30周年記念誌に各学校の指導者の先生方からお寄せいただいている原稿を拝見すると、本当にさまざまな工夫を施しながら指導をされていることがうかがえます。ただ、最近の参加校の先生方にお書きいただいたものですので、コンクールが始まった頃は、今とは違った苦労があったり、現在よりさらに大変なことがあったりしたのではないかと想像します。
田中：コンクールが始まった頃といえば、千葉聾学校の演奏が一つの基準になったのではないかと思います。当時としては斬新で、その後のコンクールの方向性を決めたと言いますか、コンクールとして今後やっていけるのではないかとの思いを抱かせるような演奏だったと思っています。
尾高：連続して金賞を取っていたね。
田中：そうです。ところで、つい最近、千葉県からの要請で千葉交響楽団というプロのオーケストラと一緒に県内の養護学校を回っていましたら、その中のひとつの学校の校長先生が、当時、千葉聾学校で指導されていた先生でした。まったくの偶然でびっくりしましたが、すでに記念誌の話が出ていましたので、ぜひ寄稿していただきたいとお願いしました（尾崎注：後掲、渡邉哲夫「コンクールから学んだ子どもの可能性」）。
尾高：あの当時の音はあるんでしょうかね。現在と比べてみるとどうなんでしょうか。
尾崎：記念誌の内容の構成を議論したとき、当時のものを発掘して何らかの形で見られるようにできないかという希望や意見は出されましたが、なかなかうまくいきませんでした。
田中：それから、最初の頃は「課題曲」と「自由曲」という二本立てで審査が行われていましたが、そのせいで応募が少なくなっていったようにも思います。30年前、全国で100ぐらいある学校のうちの30くらい応募があったと思いますが、20校程度に減ってしまったこともありました。
尾高：「コンクール」といったときの性格にもよりますが、このコンクールでは「課題曲」はなくてもいいでしょう。先ほどお話ししたように、ある明確な基準を以て選ぶわけではないので、少しでも多くの学校が応募してくれた方がいいでしょう。
田中：そうしたこともあって、現在は「自由曲」1本に絞っています。
尾崎：少し違った視点になりますが、最近の特徴としては、同じ学校で異なる学年がそれぞれ応募してくるなど、同一校の異なるグループによる複数参加も見られるようになりました。

＜各校訪問による審査＞

尾崎：コンクールの初期の頃は、二次審査の段階になると、一次審査を通過した各学校を訪問して演奏を聴いて審査するスタイルだったようですが、その点についてどのような思い出があるでしょうか。
尾高：思い出と言えばいろいろあるけれども、プロの音楽家たちと子どもたちとふれあうこと、一緒に音楽することはとても貴重でしょう。いろいろなアドバイスを直接受けた子どもたち、みんな目を輝かせていましたよね。
田中：尾高先生がピアノを弾いている子どもに「ここはこういう指で」とか、長く審査委員を務められた田村先生はフルートがご専門ですから「縦笛はこういうタンギングで」とか言われていましたね。
尾高：アドバイスを受けることで子どもたちがすごく変わる。目に見えて伸びる。出かけていってプロの人たちが教えるとやっぱり通じるんだね。それから、指導されている先生方のご苦労も間近で見ることができました。まあ、人間的な意味で、こちらとしてもいい勉強をさせてもらったと思っています。
田中：私も各地に足を運びましたが、実際に行ってみると、その場の空気、子どもたちの息づかいが伝わってきましたね。それだけではなくて、子どもたちを支える保護者、先生たちの思いのようなものまで感じられました。
尾崎：現場の持つ力みたいなものですね。
田中：現在は金賞を受賞した学校に表彰のために出向いてそこで演奏してもらっていますが、このときに昔の二次審査を思い出します。審査の際の DVD に映し出された画面からだけでは分からない要素が現れてきますね。
尾高：それはそうだと思いますよ。
尾崎：音楽を聴く上で「生（演奏）に勝るものはない」とはよく言われますね。
田中：現在は、一次審査、二次審査とも、演奏を収録した DVD を視聴する審査スタイルですが、一次審査では全体的な講評のほか、合奏のアンサンブルや音のバランス、そして演奏に関わる技術的な面についての具体的なアドバイスも返すようにしています。二次審査に進んだ各学校はそれを参考にしながら頑張るんでしょうね。一次審査の時と比べて二次審査の演奏が見違えるようにレベルアップするものが多く見受けられます。
尾高：現在の審査員の先生方が的確なアドバイスをされているということでもあるでしょうね。

＜印象に残る出来事＞

尾崎：各地の学校を訪問されたわけですが、そうした中で印象に残っているものとしてはどんなものがあるでしょうか。
尾高：旭川に行った時、飛行機が降りられないくらいの大雪で、たいへんな寒さだったのですが、行った先の学校でのハンドベルの演奏がその場の雰囲気にすごくマッチしていたことが印象に残っていますね。
田中：人数が多いところと少ないところ、いろいろありましたね。生野は子どもたちがたくさん出てきていましたけれども、四国の宇和島は学校そのものも小さかったですね。
尾高：香川の太鼓もあったね。
田中：香川は今でも常連校ですね。

尾崎：どういう感じで各学校を回られましたか。
尾高：それは田中さんの方が詳しいんじゃないかな。
田中：地域が近い4校から6校ぐらいをまとめて、都合2回ぐらいで組んでいました。盛岡の次は大阪というふうに移動距離がすごくあるときもありましたけれど。
尾高：そのときではないと思うけれど、阪神淡路大震災の後、飛行機から大阪空港に降りる時、家の屋根にブルーシートがかかっているのが見えたこともありましたね。
田中：印象的な先生方も多かったですね。弘前でしたでしょうか、小さな学校でありながら女性の先生がすごく一生懸命にやられているとか、高松の太鼓指導の先生が全身で指揮をする「熱血先生」そのものとか。
尾高：今でも太鼓は多いですか。
尾崎：多いとまで言えるかどうかですが、毎回必ず参加しています。
尾高：そういえば、名古屋だったかな、高校生がエレキ・バンドを組んで演奏するというのもありましたね。この頃、エレキ・バンドは参加しているの。
尾崎：最近の参加はないですね。いわゆるエレキ楽器ですと、エレキ・ベースはよく出てきます。

＜30年間の変化＞

尾崎：お二人ともコンクールの始まりの頃から長く審査員を務められてこられましたが、その間の変化として感じられることはどのようなものでしょうか。
尾高：委員長をやっている間、だんだんレベルが上がってくるのが見えたことはうれしかったですね。
田中：現在の審査の時にも「レベルが上がりましたね」という声は出てきます。
尾崎：たしかに、現在、審査をしているとビックリするくらい素晴らしい演奏に出会いますね。
田中：使用する楽器という面からの変化で見れば、電気的なキーボード系が多く用いられるようになりましたね。いろいろな音が出てくる機能が付いてきましたから音楽的な幅が広がりました。とはいえ、先生の力量にかかっているところも大きいですね。
尾高：アレンジは学校にある楽器をもとになさっているわけでしょう。ただ、いろいろな種類の楽器を使えばヴァラエティに富んだ色彩豊かな音楽になるというものでもないじゃないですか。あまり少ないと困りますけれど、少人数ですごくいい音楽をされていたこともありましたね。
田中：そうですね。今お話ししたキーボードを駆使した学校もあれば、私の子どもの頃から使われているような楽器を使った昔ながらの合奏という学校もあるなど多彩ですね。楽器の編成自体は審査の基準ではないんですが
尾高：とはいえ、やっぱり審査の基準の問題に戻るわけですよ。
田中：いずれにしても、長年やってみて全然違う評価が出てくるということはないですし、最終的にばらつきはないですね。
尾高：漠然としているという意味で変わらないというところでしょうか。長年やっていて「困ったね」ということになった覚えはないですね。損得のないところで素直に判断していることでうまくいくというところもあるのではないかと思いますね。そして、審査員がこの30年間であまり大きく変わらないということも特

徴だし、そのことが審査のブレが少ないことにもつながっているのではないかと思いますね。
尾崎：審査の面では、良い意味で変化が少ないということですね。
田中：支えていただいている協会の方々は長く障害児教育に携わられていますので、その経験がコンクールの方針と言いますか、基本的な姿勢を保つ上で大きいのではないかとも思います。

＜おわりに＞

尾崎：尾高先生には、最後に一言いただけますでしょうか。
尾高：子どもたちの演奏の映像を、30 年間の中でのいくつかのポイントで抜き出すなどして、しかるべきところで見ることができればいいですね。それを見て、自分たちもやってみようかという気になってくれることもあるんじゃないでしょうか。
　それから、いろいろな事情があって難しい面も多々あると思うけれども、二次審査で直接学校に出向く形式はぜひ復活してほしいですね。出向いていくことがないことは惜しい。録画された映像や音だけでは分からないことも多いと思います。
尾崎：本日は、長時間にわたって、ありがとうございます。

＜鼎談を終えて＞

　尾高先生は、1981 年の尾高賞受賞作品「オーケストラのための《イマージュ》」（私事で恐縮ですが、当時大学生であった私が初めて生で聴いた現代曲です）など多くの楽曲を生み出された日本を代表する現代作曲家でいらっしゃいますが、当日は、気さくに、そして多方面にわたって語っていただき、田中先生とのやり取りの中で、コンクールの初期の頃から現在に至るまでの月日の流れの中に刻まれているものの大きさと重さをあらためて感じさせられました。
　ここに掲載された内容以外に、自作にまつわるお話、日本のクラシック界のさまざまなエピソード、美智子皇后様による詩の朗読のための付随音楽の作曲と収録等々を、先生手ずから淹れていただいたコーヒーで奥様手作りのケーキをいただきながらうかがえたことは「記録係」として破格の「役得」でした（尾崎）。

左：尾高惇忠　氏
中：田中一嘉　氏
右：尾崎正峰　氏

世界に一つだけの楽譜

～「その子その子」のためのパート譜がもたらす音楽の至福～

全国聾学校合奏コンクール審査委員長
一橋大学大学院社会学研究科・教授
尾崎　正峰

全国聾学校合奏コンクールの30年という年月の中で、コンクール参加に努力された方々、活動を支えてこられた方々など、さまざまな方々の思いと尽力が積み重ねられてきたことに深い敬意を払いたいと思います。

審査員として、初めて全国の各校から送られてきたDVDを視聴したときのこと。演奏される曲目は、クラシックの名曲をはじめ、ポピュラー、映画音楽、アニメの主題曲など多岐にわたり、楽器編成も多様で勇壮な太鼓群まであり、また、演奏の場面にさまざまな趣向を凝らした「演出」を盛り込んだものもあるなど、多彩で個性的な音楽の展開に審査員という立場を忘れて楽しんでいました。

そして、何よりも「音を聞き取ることが不自由なはずなのに、どうしてここまで演奏が出来るのか」という鮮烈な驚きの連続でした。

試聴する演奏の数を重ね、少し落ち着きを取り戻して映像を振り返ってみたとき、あることに気づくと同時に、教育学者の大田堯東京大学名誉教授が「子どもの権利条約」についてふれられたとき、条文の原文にある「Child」の複数形である「Children」を一般的な「子どもたち」という訳ではなく「その子その子」と表現されていたことを思い出していました（「子どもの権利条約」とは、1989年11月の国連総会で採択された、子ども（児童）の権利について定めた国際条約です。条文の全文は日本ユニセフ協会の以下のホームページで見ることができます。https://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_rig_all.html）。

「気づいたこと」とは、演奏されている楽譜は「既製品」ではなく各学校の「手作り」であること、そして、「パート譜」は「その子その子」の個性に合わせた、「その子その子」のためにだけ用意されたものであるということでした。SMAPの作品をもじっていえば「世界に一つだけの楽譜」。

楽譜として形を整え、コンクール応募に至るまでの先生方のご苦労はいかばかりかとの推測と共に感嘆しきりでしたが、今回の文集に掲載されている先生方の文章に、練習過程で「その子その子」の状況を把握されること、そして、意見や希望を聞くことなどを通して何度も書き直すこと、などの経験や経緯が記されており、ご苦労の一端を感じ取ることができました。また、教育の原点とはこういうものだ、と問わず語りに伝えられているとの思いにもとらわれました。

合奏、すなわち、音楽を共に奏でること。それは私自身にとってもかけがえのない価値をもつ営みです。大学オーケストラに入団して最初の練習に参加した時、それまでのヴァイオリンをひとりで弾いているときとは全く異なる音の世界が広がり、その中に自分がいることの喜びを感じたことを今でも忘れることはできません。その強烈な印象があるため、その後の約40年間、オーケストラでの活動を続け、音楽とさまざまに関わっていることにつながっているのだと思います。

コンクールの審査のために送られてきた映像には、指揮の先生だけでなく、子ども同士が助け合いながら演奏に取り組む様子が映し出されることがしばしばあります。そして、今回の文集の先生方の文章から、「本番」に至るまで、一人ひとりのがんばりと共に、互いの支え合い、励まし合いがあることを知ることができました。

目標を同じくして、みんながひとつになって取り組むこと、「その子その子」のパート譜から奏でられる音が重なることで生み出される音楽は世界にたった一つの個性的な存在、唯一無二の作品です。それがゆえに、演奏する側だけではなく、奏でられる音楽を見聞きする側にも至福の時をもたらしてくれるのです。

コンクールに参加すること、そして、卒業後にも音楽を続けていくこと、そのための環境、条件は厳しいものがあると思われますが、共にコンクールをめざし、音楽を共に奏でたことで感じた喜び。その経験と思い出が、「その子その子」の音楽の将来、そして人生の未来につながる糧となってくれることを願ってやみません。

第５回全国聾学校合奏コンクール表彰式
1994 年 2 月 18 日　国立教育会館
金賞・文部科学大臣奨励賞受賞校
千葉県立千葉聾学校

全国聾学校合奏コンクール・第３０回を迎えて思うこと

全国聾学校合奏コンクール審査委員
昭和音楽大学講師・指揮者
田中　一嘉

全国聾学校コンクールが第３０回を迎えることになりましたが、第１回目より審査委員としてお付き合いさせていただいております私にとりましては様々な思い出があります。

まず第１回目の審査会は審査方法として、カセットテープによる第一次審査でした。2回目以降はビデオ、そして現在のようにDVDへと変わっていく訳ですが、この時は、３０数校からの応募作品を録音の音のみで審査するという、かなり難しい作業であったことを今でも良く覚えております。そして数校を選び、２次審査ということで今度は審査員が直接学校に赴き、審査をしました。予想はしていたことですが、審査は日本全国広範囲にわたり、かなり大変なことでした。審査員のスケジュール等のこともあり、遠いところ（弘前、徳島など）は、当時の田中祐二事務局長、笠松長重審査委員、そして私の３名で現地へ赴き審査。そして持ち帰り報告、他の審査委員との話し合いにて各賞が決められておりました。

２回目以降は第一次審査もビデオ審査になり、現地での２次審査も審査委員が全員参加するようになり、以後そのような方法が10年ほど続きました。

その後は一次審査、2次審査共にDVDでの審査になり、当初の課題曲、自由曲の2曲から自由曲1曲になるなど、方法を変えながら現在に至っております。

これまでの審査で印象に残ったこと、思い出深いものといえば、何といっても当初行っていた現地に赴いての審査です。

寒いところ、暑いところ、都市部、山間部など、日本全国ですから様々なところへ出掛けて行きました。人数の多い学校、数人の学校など、いろいろ見ることが出来、審査会場の部屋の中では伺い知ることの出来ない子供たちの息づかい、指導する先生の熱意など、直接肌で感じ取ることが出来ました。このことは，現在の審査でも演奏を聴き、その思いがどのようなものであるか、より深いところで思いを馳せることが出来、大いに意義のあるものであったと思っております。

これまで見てきた審査で、具体的な変化としては、楽器の充実、変化などが特に感じられます。やはり30年というと隔世の感があります。初期の頃はキーボードをはじめ電気楽器（電子楽器）は決して多くは無かったような気がしますが、時代と共に楽器の種類も増え、様々な機能も加わり、それに伴い技術的にも音響的にも音色及びダイナミックについて多様性が出てきたように感じられます。
指導される先生方のアレンジと共に、子供たちの感性がより大きく花開く可能性がまだまだ無限にあるということに大いに期待したいと思います。

最後になりましたが、ここまで続けてこられた聴覚障害者教育福祉協会及び、それを支えてくださる関係者の皆様。ご指導をされた各校の先生方、子供たちを温かく見守って下さる多くの方々に心からの敬意と感謝の意を表すると共に、これからも永きにわたって続けられることを切に願っております。

煌く瞳が奏でる音楽の未来

全国聾学校合奏コンクール審査委員
国立音楽大学・山梨大学人間教育学部講師
全日本打楽器連盟事務局長
目黒　一則

全国聾学校合奏コンクール審査員の末席に加えて頂き既に１０年程。当時、委員長として出席された尾高惇忠氏（東京藝術大学名誉教授）が「昨今の聾学校合奏コンクールには打楽器が多様に加えられるため是非、審査会に打楽器専門の方に参加頂きたい」とのご要望があり、指揮者・田中一嘉氏のご紹介で私が参加させて頂く事になりました。

このコンクールは現在、映像録音（DVD）による演奏を聴きながら採点する方式にて進められます。その映像に触れる度に、演奏する生徒さん達が先生の指揮に一点集中する純粋な眩しさに満ちていると感じています。これは勿論、この録音までの先生方の真摯な教育姿勢が画面から感じられるだけではなく、一人ひとりに注がれる愛情までもが伝わり、その都度に感銘を受けております。指導される先生の真摯な教育姿勢は映像からエネルギッシュに感じられ、演奏の生徒さん一人ひとりに注がれる愛情も充分に伝わります。

２０１８年１１月、審査委員の草間みどり先生（東京都立立川ろう学校副校長）からのご依頼で、国立音楽大学の打楽器専攻性と共に小学校の授業の機会を頂きました。私が全国で展開している手や身体を用いたリズムコミュニケーション・ラテン楽器の奏法とリズム学習のプログラムを全員が十分に反応・吸収し楽しんで表現してくれました。音楽担当の先生・クラス担当の先生方と共に生徒さんのはかり知れない潜在能力とエネルギーに感動した一時でした。

合奏している生徒さん達の瞳は、音楽の原点である「音楽はなぜ心に響くのか」という課題を私に与えてくれています。

３０回を経てこのコンクールが未来への羅針盤となるべく、益々の発展をされる様願います。

全国聾学校合奏コンクールに接して

全国聾学校合奏コンクール審査委員
東京都立立川ろう学校・副校長
草間　みどり

全国合奏コンクール30周年おめでとうございます。30年間聾学校合奏コンクールにご尽力いただいた聴覚障害者教育福祉協会のスタッフの皆様に感謝申し上げます。私は現在、合奏コンクール審査員をさせていただいています。

30数年前、東京都立大塚ろう学校で教鞭をとっている頃、田中祐二校長先生が、給食を全校でとっている食堂の私の席へ来られ「今度全国合奏コンクールをやろうと進めている、どう思う？」とおっしゃられました。校長先生から話しかけてくださることなど、ましてや、こんな若手に進み寄られることなど考えられない時代ですから、ドキドキしました。その頃の私は、聞こえの厳しい幼児児童が音楽を楽しんでいる、でも、さらに音楽の魅力をどのように教えるのがよいのか悩む毎日でした。「いいと思います。」と、あまり考えずに返事をしたことが昨日のことのようです。

合奏コンクールに参加されてきた先生方、また、参加されなくても聾学校の音楽の先生方は、皆、子供達に音楽の楽しさ、深さ、美しさ、つまり音楽そのものをわかりやすく伝えるべく努力し、研鑽を積んで来られ、今も様々な工夫や挑戦をしていらっしゃいます。通常の学校ならば、すぐに子供たちは理解し表現できますが、聾学校の子供達には難しいことがたくさんあります。多くの壁があります。でもその壁を乗り越える指導の工夫を先生方は丁寧にしていらっしゃいます。

合奏コンクールに参加された先生方はよりよい作品づくりに力を入れられてきました。学校によっては、合奏コンクールよりも日々の学習を大切にされている先生もいらっしゃるでしょう。合奏コンクールに参加するためには、どの曲をどう一人一人の力に合わせて編曲するか、どの時間でどう練習させるか、どんな協力体制を作っておくか、何よりどう演奏させるか、悩みは尽きなかったことでしょう。でも、出来上がった時の喜びと、子供達の成長を皆で喜び合っているのではないでしょうか。私たち審査員は、演奏の完成度はもちろんですが、音楽創りの背景を考え日々のご努力を拝察させていただいています。どの作品も指導の賜物です。演奏し終わった時の子供たちの表情がとてもいいです。

聾学校の音楽教育への挑戦を発表する場として、今後とも全国合奏コンクールの発展を心からお祈りしております。

合奏コンクールに思うこと

元全国聾学校合奏コンクール審査委員
元東京都立葛飾ろう学校長
林　茂和

全国聾学校合奏コンクールは、使用楽器の面から見ても、鍵盤打楽器を含む打楽器中心から、パート別アコーディオン、オルガン、ピアノ、弦楽器、管楽器、キーボードなどの電子楽器等の導入と、聾学校の現場の先生方が聴覚障害児童・生徒の残存聴力を活かした可能性と音楽を演奏する喜びを広げ伸ばしてきたことが深く感じられるものでした。また、学習指導要領で日本の伝統的文化の継承が謳われたり、知的障害特別支援学校からの転任教員が多くなったことで、和太鼓に集中する傾向が一時見られたことも特徴的でした。

更に、聾学校の在籍人数が減少する中で、少人数のアンサンブル的な形態も見られるようになり、如何にして表現したり発表したりすることの素晴らしさや充実感を聴覚障害児童・生徒に味わわせるか心に砕かれた先生方のご苦労が伺える一面もありました。

このコンクールでは、各審査員の先生方が、発達段階や学年・学部に応じた審査に心がけられるばかりでなく、指導法、楽器構成や編曲方法に至るまでコメントを作成し、指導された先生にお伝えするとともに相談に乗ってきた歴史があります。審査員の先生方のご配慮に心から感謝いたしております。

一方で、平成16年度辺りから全国聾学校長会でも音楽科に関する調査・報告がされ、指導の手引きの刊行が望まれ、平成18・19年度と関東・東京都ろう教育研究会音楽研究会の協力を得て、平成21年 3月に、全国聾学校校長会編「聴覚障害教育の現状と課題」別冊として「聾・聴覚障害特別支援学校における音楽科指導の手引き」が作成されました。文部科学省教科調査官、国立特別支援教育総合研究所等の多くの先生からも貴重なご指導・ご助言を頂いたもので、各校に校長用と音楽担当用の２部を配布し、音楽科教育の必要性を徹底させる努力をしてきました。

全国聾学校合奏コンクールへの参加と併せて、「聾・聴覚障害特別支援学校における音楽科指導の手引き」が活用されることを願って止みません。

全国聾学校合奏コンクール
第１回から第26回までの変遷と思い出

元全国聾学校合奏コンクール審査委員
フルート奏者
田村　隆

平成元年から始まった全国聾学校合奏コンクールの審査員を、第１回から第２６回まで務めさせていただい田村隆でございます。

１次審査、２次審査と続くこのコンクールは、当初１次審査はカセットテーによる審査でしたが、第２回目からはビデオテープ、さらには８ミリビデオテープ、そしてDVDによる審査へと変わっていきました。

２次審査は当該校に審査員が出向いて審査に当たるという形をとりましたが、これも後には予算の都合で映像と音源のみによる審査となりました。さらに、すべての演奏には審査員短評がつけられました。

これら審査方法の変遷は、常により公正な審査を心掛け、短評におけるアドバイスがより的確であるようにという協会、審査員の皆様の真摯な姿勢の表れに他なりません。

はじめの数年間の２次審査における子供たちとの出会いは大変に印象深いものでした。　北国の深々と降り積もる雪の中を通ってやっと行き着いた学校で聴いた演奏のなんと透明感あふれるものだったか。そして、２重のハンディを持った子が演奏の最後にただ１度打ったトライアングルの美しい響きは、今でも耳の奥に残っています。また、恐らくは全校生徒出演の５人がそれぞれに見事に力を発揮しその役割を果たし切っている演奏。大人数なのに一糸乱れぬ、力強さと同時に詩情さえも感じさせる和太鼓の演奏。

いずれも忘れられない大切なものとして心に残っております。

私に得難い経験を与えてくださり、時に生きる励みにもなったこの出会いに、今はただ感謝の気持ちで一杯です。

コンクールから学んだ子どもの可能性

千葉県立袖ケ浦特別支援学校長
渡邉　哲夫
（第１回コンクールから千葉聾学校の指導に当たった）

全国聾学校合奏コンクール３０周年、誠におめでとうございます。このコンクールが、四半世紀を超えて聾学校の児童生徒の文化的活動充実の一翼を担ってこられたことの意義を思いますと、ここに至るまでの関係者の皆様の御尽力に心より敬意を表さずにはいられません。

私とコンクールの御縁は第１回目（平成元年度）に遡ります。当時、私は千葉県立千葉聾学校に勤務し、音楽の指導を担当していましたが、音楽を聴いて旋律や和音を識別できる子は皆無でした。教員６年目、若気の至りと生来の思慮の浅さも手伝い、「教科書に載っている『旋律やハーモニーが魅力の音楽』って、聞こえない（=旋律やハーモニーを識別できない）子どもたちにとって楽しいの?」と悩む日々でした。全国聾学校合奏コンクール参加校募集の案内があったのは、そんな思いに悶々としていたときでした。課題曲「河は呼んでいる」を見て、私は「こういう音楽は楽しめないんだよ。」と思い、応募には消極的でした。

当時の千葉聾学校の中学部と高等部には「音楽クラブ」があり、生徒たちに　諮ってみたところ「ぜひ参加したい。」と言うのです。応募は半ば生徒たちの「やる気」に押された形でした。練習する生徒たちの「真剣さ」「集中力」は正直驚きでした。２ヶ月ほどの練習成果を録音して、いざ応募。一次選考、二次選考と通過し、結果は「金賞」（第一位）。生徒たちの喜びようは忘れられません。その後、千葉聾学校は毎年この合奏コンクールに参加し、５年連続で金賞を受賞しました。また、第４回目と第５回目は金賞と併せて文部大臣奨励賞（当時）の栄も賜りました。改めて、千葉聾学校の生徒たちは凄かったのだと思い返します。

毎年、合奏コンクールへの参加を重ねる生徒たちを見ているうちに「この子たちは私の想像を超えたところで、音楽を奏でる魅力を感じているに違いない。」と思い直すようになりました。私が感じている旋律やハーモニーの魅力と、生徒たちの感じている音楽の魅力は違っているのかもしれません。いや、違うのだと思います。恐らく生徒たちは、自分たちが感じる世界の中に魅力を見い出していたからこそ、あの真剣な取組の姿になっていたのでしょう。

３０年前の「旋律やハーモニーを感じられなくて、音楽は楽しいのか?」という思い（疑問）から離れられなかった私。今、思い返すと思慮の浅い音楽指導の捉え方だったと思います。私は、生徒たちが感じていた音楽の魅力をしっかりと理解することなく、異動で聾学校を去りました。今、聾学校の生徒たちと一緒に音楽を奏でる機会があるとすれば、彼らが感じている魅力を探求し、その魅力を自分も一緒に感じてみたいと思います。

全国聾学校合奏コンクールは、聴覚に障害のある子どもたちが、それぞれの感覚の中で音楽の魅力を見い出し人生を豊かにすることを応援する取組として、今後も継承されていくことでしょう。聾学校の音楽教育がこのコンクールとともに、ますます充実発展していくことを心から願ってやみません。

八戸聾学校と合奏コンクール

青森県十和田市立東中学校
大嶌　範子
（平成29年度まで八戸聾学校に勤務し指導を担当した）

当時の学校だよりから、本校と全国聾学校合奏コンクールを振り返りたいと思います。『一月二十一日の給食前の時間、本校に朗報が流れました。「八戸聾学校和太鼓合奏～渡る風がみたもの～金賞・文部科学大臣賞!」「全国で一位になったんだって!」「やったー。」子どもたちの歓声と輝く笑顔で、一気に春が来たようでした。　～中略～　青森県から金賞・文部科学大臣賞が選ばれるのは、今回が初めてです。最終審査の講評には、「貴校の演奏は、安定感もあり表現力も豊かで、大変立派でした。…来年度も皆さんの演奏を楽しみにしています。」と書いてありました。

本校の合奏には、他校とは異なるいくつかの特色があります。その中の一つが、小・中学部の児童生徒全員の合奏であることです。選ばれた人だけでなく、成長段階ごとに区切ったグループでもなく、全員がそれぞれの役割をしっかりと担い、互いに補い合ったり、響かせ合ったりして成り立っています。緊張して間違ったり、分からなくなったりしても、「必ず、みんなが助けてくれる。演奏が続く限り、もう一度合奏に加わるタイミングは絶対にある。」と堅く信じ合って演奏しています。これこそがアンサンブルの素晴らしさではないでしょうか。そして、毎回真剣に練習を重ねた結果、高い演奏技術を身に付け、友達との絆、プレッシャーを跳ね返すほどの強い精神力を得て、最高の賞を受けることができました。これからも、夢に向かって挑戦し続けてほしいと願っています。』

本校全職員の協力の下、子どもたちと共に挑み続け、尾高惇忠先生をはじめとする御高名な先生方に審査・講評していただけることに心から感謝しております。これからも全国聾学校合奏コンクールが聾学校の子どもたちにとって、音楽活動を楽しみ、チャレンジする機会であってほしいと願っています。

合奏コンクールを通しての成長と喜び

岩手県立盛岡聴覚支援学校
斎藤　麻子

本校は平成元年からコンクールに参加し、平成七年から３年連続で金賞を受賞した実績があります。その後も歴代の先生方が合奏コンクールに情熱を注ぎ、素晴らしい演奏を作り上げてきた歴史があります。これまでの取り組みと実績に憧れと敬意をもって引き継ぎ、ほぼ毎年コンクールに向けて取り組んでいます。

赴任した最初の年に「聴覚支援学校の合奏は、とにかく指揮者を見ること。そして心を一つにすること。」と教わりました。それが一番大切なことは分かっていても、音やリズムを練習するのに必死で、今でも、まとまりのある音楽にするまでに至らないことの繰り返しです。四年目にして、指揮者を見る、心を一つにする、という意味がよくわかるようになりました。過去に、生徒の不仲が演奏に現れ、曲がまとまらなかったため練習を中断し、生徒同士が話し合いをして不仲を取り除く時間を作ったということを聞きました。心を一つにするために、いかにその時間が必要だったかということが、今、とてもよく分かります。

指揮をしていて、気持ちが逸れている子がわかるようになりました。それは何か気持ちの乱れがあったかもしれませんが、練習不足の不安かもしれません。ただ、自分の演奏に十分自信がもてるようになるまで練習をするには時間が足りなく、練習時間の確保が課題にもなっています。個人の練習をとおしてそれぞれの生徒の課題が浮かび上がってきます。練習を重ねて課題を克服する力を身につけられたら素晴らしいことです。そして、合奏演奏は皆で力を合わせて心を一つにすることができる貴重なものです。合奏への取組みの中で成長し、仲間とともに作り上げる喜びを感じられる合奏を目指していきたいと思っています。

３０周年記念誌に寄せて

福島県立聴覚支援学校
鈴木　由里子

平成26年4月、福島県立聾学校（現聴覚支援学校）の中学部に音楽科の教師として赴任した私が最初に聞いたのは、「去年の合奏コンクールでジュピターをやって、文部科学大臣賞を頂いたんだよ。」という同僚の言葉でした。「それって全国一位ってことですよね！」

その3年前、平成23年3月に東日本は大地震に見舞われ、他の養護学校に勤めていた私は育児期休暇中で、平成25年に復帰したのですが、育児と久しぶりの仕事に追われ、聾学校の合奏コンクールでの活躍を知らずに赴任したというわけでした。前任の先生は他県に採用となり、特別に引き継ぎもないまま始まった26年度は，いろんな方から「今年も頑張って下さいね。「何の曲をやるんですか？」と声をかけて頂くのですが、まだ生徒たちの合奏に対する実態もわからずにいた私は、「今までどんな楽器をやったの？」「合奏でどんな曲をやりたい？」と生徒に聞きながら練習を始めたのを、今も覚えています。

福島県立聴覚支援学校は、郡山市にある本校と、福島・いわき・会津にある3つの分校からなりますが、分校は幼・小学部までで、中学部になると皆、本校に集まってきます。

小学校の難聴学級からも来る生徒もおり、その年によって人数も実態もまちまちで、楽器編成や選曲には毎年苦労しますが、合奏の指導をしていて感じるのは、幼稚部・小学部時代に子どもたちに基礎的な音楽の力を付けて下さっている先生方の存在の大きさです。

聴こえにくい子がリズムをとったりメロディーを演奏したりするには、工夫をこらした指導と地道な練習が必要です。その積み重ねがあって初めて、中学部で新しい曲や楽器に挑戦したいという気持ちが生まれてくると思います。生徒一人ひとりの音を紡ぎ合わせ一曲を作り上げるという体験と共に、その演奏を審査の先生方がきちっと聴いて今後のアドバイスまで下さるというこの合奏コンクールは、生徒にも指導する私たちにも大変貴重な場となっています。

心を合わせて

福島県立聴覚支援学校平校
白土　かおり

平校では、２学期になると合奏コンクールに向けての練習が始まり、児童たちには今年は何の楽器を担当してどんな曲を演奏するのかを期待する姿が見られます。私は聴覚に障害があり、周りの音を聞いて合わせることが難しい児童たちが、どうすれば合奏で音を合わせる楽しさを感じられるのかを常に考え指導を続けてきました。

赴任した当初は、一人一人の実態に合わせた楽器の分担を考え、編曲することに苦労しました。まず自分のパートを正しく演奏するために、何度も階名唱をしながら音の進行とリズムを覚えるための個別練習を繰り返しました。時には覚えきれずに泣き出す児童もいましたが、みんなで合わせたいという目標に向かい、あきらめない心を持って頑張りました。次に自分のパートを覚えた児童を集めて少人数の分奏を行うと、教師の指揮を見て演奏することで、隣の友達とも音が重なっていることを感じられる児童たちも「私も早く合わせたい。」と意欲的に演奏し、次々と分奏に加わります。最後に全員で合奏になった時の児童たちの満足気な表情は、今でも忘れられません。

私が赴任した時の１年生が、今年６年生になりました。指揮を見て自分の楽器を演奏することで精一杯だった彼らも、今では下級生のお手本となりました。６年生が自主的に朝練をする姿を見て、下級生が集まって来てみんなで練習が始まるという時もありました。合奏の練習の中で、上級生が下級生に教え、下級生が上級生の姿から学ぶという絆が生まれ、その絆をつないでいるのは、みんなで１つの音楽を作り上げようとする想いなのです。

私は、児童たちと音楽を作っていくことで音楽は耳で聞くだけでなく、心で感じるものだと日々、児童たちから教えられています。

気持ちを合わせて

福島県立聴覚支援学校会津校
五十嵐　早苗

福島県には本分校合わせて四校の聴覚支援学校があります。平成二十五年度に本校(郡山市)が金賞受賞したことをきっかけに、会津校も学習の成果を評価して頂こうと応募することにしました。小規模校のため、様々なリソースを活用して子ども達の学習意欲を高めたいというねらいも含まれています。

現在、小学部は二名の在籍です。応募初年度は二年生だった今の六年生は、このコンクールを通して、技能面だけでなく友達と音を合わせる楽しさや難しさを感じ取ってきています。個別の練習では、ひたむきに自分のパート習得に取り組みながらも、三学年下の下級生の様子を気にかけ、進捗状況を尋ねたり難しい部分を励ましたりしてくれます。下級生も、上級生に負けじと自発的に楽譜を持ち帰って家で練習してくる等、二名だからこそ生まれる互いを強く意識する気持ちが、二つの音を重ねる楽しさにつながっていると感じています。

一方、特に高音域が聞き取りにくい子ども達のきこえの特性からは合わせる難しさも生じます。今年度、初挑戦するリコーダー二重奏は音色自体が高いため、息づかいや指づかいでの調整が欠かせません。子ども達は体全体の感覚で表現を工夫しています。

コンクール間近には、客観的な目と耳で自分たちの演奏をとらえるため、録画した演奏を自己評価しています。指揮者としては、二つの音のハーモニーが美しい個所を伝え、実感してもらうことを心がけています。

先日、本校よりいらした校長先生から、

「ハーモニーが素晴らしいね!」

とお褒めの言葉を頂き笑顔いっぱいになった二人と私。合奏には演奏する楽しさと聴いてもらう喜びがあることを知った子ども達。

これからも、音楽を楽しんでいきます。

音と心のハーモニー

茨城県立水戸聾学校
蜷原　けい子

「本番いきます。」
「失敗した。もう一度やりたい。」
「では、もう一度だけ。」
「うーん・・ちょっと・・」
「今度こそ、最後ね。」
ビデオ撮りの度繰り返される光景である。

このコンクールはビデオでの参加なので、参加しやすい。しかし、失敗するとやり直せるし、次の方がうまくいくのでは、という期待から、なかなか最後にできず、時間が許す限り挑戦して、それでも気持ちを残しながら終了するということになる。

子ども達は、練習を重ね、努力を積んで、細かいリズムが演奏できるようになったり、自分の音と友達の音の違いに気付いたりできるようになっていく。子ども達自身もそれが分かり、上達することの楽しさを感じているようだ。いつの間にか友達のパートを覚えて演奏していることもある。

私自身は、初めて参加したのが１０年以上前なので、そのころと比べると、人工内耳や補聴器の性能によるものなのだろうか、子ども達の音に対する反応が格段に良くなっているように感じる。しかし、合奏という音のハーモニーがどれくらい届いているのか。自分達の演奏しているビデオを見ながら、「これって、きれいに合っているの?」と聞いてくることには変わりがない。それでも楽器の演奏をするのは好き、新しい曲がひけるようになるとうれしい、という子ども達の願いを叶えるためにこれからも挑戦していきたいと思っている。

みんなの心を一つに

東京都立大塚ろう学校
本田　章江

都立大塚ろう学校では、５年生チームと６年生チームが、毎年合奏コンクールに参加しています。一つの学校の中に二つのチームがあることで、互いに刺激し合い、切磋琢磨しながら成長していく様子が見られます。

演奏の技術を高めていくことよりも、学年の友達と同じ目標に向かってどのように努力していくかが、一番の目的になっています。例えば、昼休みの練習で、チームの一人が音楽室に来ないで校庭で遊んでいたとします。その行動に対し、誰も練習に行こうと誘わなければ、合奏は成り立ちません。自分が頑張ると同時に、仲間への呼び掛けも必要であることを常に伝え続け、学年の全員が同じ気持ちで作り上げていく演奏を目指しています。

そのため、音楽専科の私だけの力では到底この取り組みは成り立ちません。担任との連携、保護者の理解と協力、学校あげての応援が、子供たちのやる気をサポートし、何ものにも代えがたい取り組みとなっています。

毎年３月になると、４年生が「先生、来年は僕たちも合奏やりたいです。」と声が上がり、心の準備が始まります。「スターウォーズの曲がかっこいいよ。」「ハリーポッターも映画で見たからやってみたいな。」と好きな曲を探してくる子もいます。中には「私は、合奏は自信がないです。」と不安そうな子も当然います。そんな友達をどうやって誘うのかと、子供たちのやり取りを見ていると本当に面白く、さて、どんなチームに仕上がっていくのかと、楽しみになります。先輩たちに憧れる気持ちと、合奏コンクールで金賞を取りたいという具体的かつ大きな目標に挑戦する気持ちが、取り組みの支えとなっています。最高の達成感を味わい、将来子供たちが自信をもって生きていけるよう、一人一人の気持ちとしっかりと向き合いながら指導を進めています。

永年、このような機会を設けて下さっている聴覚障害者教育福祉協会の方々に、心からの感謝を申し上げます。

３０周年に寄せて

東京都立葛飾ろう学校
赤司　郁子

葛飾ろう学校でも過去に何度か参加させていただきました。私は小学部の担当ですが、４年前にユーチューブで当時の金賞受賞校だった鹿児島聾学校の素晴らしい「リバーダンス」を見て感銘を受けたことがきっかけで、合奏コンクールに興味をもちました。

本校の文化祭では和太鼓の発表を伝統的に行っているのですが、その年は諸事情で和太鼓が十分に使用できず、代わりに５分位の器楽曲を発表することになり、小学部として初めて合奏コンクールに参加する口実ができました。３・４年生１４人で、数台の木琴、鉄琴、コンガ、アゴゴ、スティールドラム、ウィンドチャイム等のラテン系打楽器に、２台のキーボードという編成で、小３の教科書に載っている短いラテン曲を、日本の童謡を何曲か織り交ぜたりして、編曲しました。簡単な短い曲にどうやって起承転結を膨らませるか、という構成上の工夫もそうですが、和太鼓と比べて合奏は動きが少なく見た目が地味なので、文化祭で保護者に満足していただくために、我が子が何をどの位頑張ったのか分かるように、それぞれのパートが際立つようなソロフレーズを入れて、どの子にも見せ場をつくりたいと思いました。器用にできる子どもばかりではないので、そこが一番苦労したところですが、皆音楽が大好きで、音楽室はいつでも明るい雰囲気で満たされていました。私自身、本当に忘れられないくらい楽しい時間でした。１３人いれば１３通りの楽譜（＝目標課題）を設定し、それぞれの子どもの技量に合わせた、個に応じた取り組みがし易い点は、合奏指導が和太鼓よりも勝る点だと思います。

コンクールに参加することは、子ども達だけでなく指導者としての学びも深く貴重な経験をさせていただきました。一方では、かなりの労力も伴うため、学校規模で取り組んでいく必要があります。今後もろう学校の音楽活動が活性化されていくように、努力していきたいと思います。

目標と自信をもてた、合奏コンクール

東京都立中央ろう学校
佐々木　恵子

合奏コンクールは、本校にとって、音楽を発表する貴重な機会であり、演奏をとおして仲間と一緒に一つの作品をつくりあげるということもとても良い経験になっています。

練習では、短い時間の中でどのように練習内容を充実させれば良いのかとても悩みました。選択音楽の授業からの発表でしたので、週に１回の授業だけでは、練習した内容を積み重ねていくことが難しく、休み時間のわずかな時間も活用して練習をしてきました。

例年、合奏コンクールに参加させていただき、演奏する姿を下級生が見て、器楽合奏に興味を持つ生徒が、年々と増えてきました。「演奏をしてみたい。」「音楽の発表をしてみたい。」という意見を生徒たちから聞くことができるようになってきました。しかし、演奏の練習を実際に始めると、１人で自由に演奏するのではなく、仲間と息を合わせて演奏することの難しさを感じる生徒もいました。合奏する経験が初めてだった生徒は、指揮に合わせて演奏することに慣れていないため、指揮を見ることを意識できるようにすることから一緒に練習を始めました。

また、生徒同士で話し合う時間を設け、どのように演奏したら良いのか等、意見を出し合い、教員と相談しながら、曲をつくりあげてきました。演奏を発表できた後、達成感を得られた生徒の姿も見られました。

生徒が演奏技術を高めていくだけではなく、合奏へ興味をもち、目標に向かって練習を積み重ねていく大切さを伝えています。演奏することを楽しめるような内容を今後も考えていきたいとおもっています。

この一叩きに熱を込めて

静岡県立静岡聴覚特別支援学校
教諭　山根　渉

耳が聞こえないのに、太鼓なんてできるのか。この疑問は、知り合いの先生方から非常に多く問われました。私自身、最初は同じ疑問をもっていました。耳の聞こえにくい彼らに太鼓の演奏ができるのか。また、彼らの成長において、太鼓は必要なことなのか。

昨年度は、主となって太鼓の指導をする先生を補助することが私の役目でした。私自身リズム感がなく、太鼓などは最も苦手とする部類でしたが、そんな私から見ても、4月の彼らには強い不安を感じるありさまでした。

しかしそんな不安も、すぐに杞憂だと気付きました。半年もすれば、大半の生徒が私より上達していたのです。教師として恥じる反面、彼らの成長に胸が熱くなりました。もちろん主となって指導してくださった先生方や外部講師の方の御力もありました。御二方とも素晴らしい先生で、生徒の実力をぐんぐん伸ばしてくださいました。

そして、それに応えるように生徒たちは努力を重ねました。必死になって指揮に合わせようと集中する眼差しや、朝から教室で自主練習している姿は、私には輝いて見えました。その輝きの中に、私は必要性を見たのです。

太鼓の授業を通して、様々な力を養うことができます。音の強弱の理解、リズム感、周囲の音に合わせようとする姿勢。彼らには本当に必要な力です。しかしそれ以上に、難しい、リズムに挑戦しようとする心が、できないことをできないままにしない心が、彼らの心に芽吹いています。太鼓は心を育てるのです。

昨年度は本コンクールにて努力賞を賜りました。光栄に思う反面、悔し涙を流す生徒もおり、生徒は更に上を見ているのだと痛感しました。彼らの燃え上がるやる気に、私も全力で応えたい。今年は「一叩入魂」をテーマに掲げ、全身全霊の熱を込めて演奏致します。

音楽と生徒との架け橋に

愛知県立一宮聾学校
福田　和枝

「この曲、テレビで演奏していたよ」、
「この曲、お母さんが好きな曲だって」、
「私、この曲のこの部分が好き」など合奏を練習している音楽文化部員や合奏の発表を聞いた生徒たちが今年も私に話しかけてきた。
「うちの子の楽譜を見たら、びっくり。あんな難しい旋律、私には弾けません。緊張していたけど何とか弾けていましたね」とは、11月初旬に行われた学習発表会のオープニングで演奏した後に、木琴を担当した生徒のお母様からいただいたことばである。演奏後の拍手や会場の人の笑顔、御家族、友だち、教職員の講評が部員や私の励みとなっている。

合奏コンクールに参加している音楽文化部員は、運動部と兼部している中学部と高等部の音楽が好きな生徒たちである。今年度は過去最多の19名の部員数となったので、２グループで演奏することにした。合奏曲の選定は、組曲の中から快活で速い曲と優雅でゆったりとした曲のどちらかを生徒が選択できるように、曲の背景や音色などの説明を加えて提示した。実際に練習に入ると、自身のパート譜の練習がはかどらず楽しくないと訴える生徒がいる反面、演奏箇所を増やしてほしいと言ってくる生徒等、生徒自身が自分の能力と向き合うことになる。苦しい時期を過ぎ、ある程度演奏できるようになると互いの音やリズムを口ずさんだり、一部を演奏し合ったりするなど楽しんでいる様子が見られた。

合奏コンクールに参加することで、曲への興味が広がる機会となり、曲の演奏方法を工夫することで生徒自身の豊かな感情表現にもつながっていると実感している。

「音が苦」の状態から「音が楽しい、音楽」になるまで、生徒に寄り添いながら練習を重ねる時間が、私自身にとって至福のときである。これからも様々な曲と生徒が出会う機会をつくれるよう、自己研鑽に努めたい。

合奏コンクールを通して

京都府立聾学校
伯耆　初予

京都府立聾学校は昨年初めて合奏コンクールに参加し、今年で 2 度目となります。小学部の児童は 16 名で、人懐っこい性格でお客さんが来ると積極的に自己紹介をする明るい子どもたちです。

「聴覚に障害のある子どもたちに、どうすれば合奏の楽しさに気づいてもらえるか。単に楽しかったではなく、教科として音楽の評価をどのように行うか」今年度参加するにあたって学部全体で考えました。児童一人ひとりが、少し上の目標を達成できるように課題設定し、音楽的な技術の向上とともに、周囲とリズムを合わせようとする気持ちや、高学年がリーダーシップをとって集団をまとめていくことに重点を置いた取組を行いました。

しかし、合奏の収録を迎えるまでの道のりは平坦ではありませんでした。譜面は児童の実態に合わせて何度も担当者で修正をかけました。子どもたちは、テンポやリズムを合わせるために暗譜し、指導者を見て演奏するようにしました。合同練習の時間が最小限しか確保できないため、休み時間や隙間の時間を利用して個人練習を繰り返し、ようやく合奏の形が見え始めました。

練習をはじめた頃は「合奏難しい!」と言っていた子どもたちが、日が経つにつれて「楽譜覚えたよ!」「難しいけれど楽しい!」「今度はキーボードを弾きたい!」などの声が聞こえ始め、少しずつですが、周りの友だちの演奏に合わせようとする姿勢も見られるようになりました。

小学部の中では年間を通して様々な行事があります。しかし、1 年生から 6 年生の児童が一堂に会して 1 つの目標に取組むものは他にありません。今後、継続的に音楽コンクールへ参加することを通して「来年はこんな楽器をしたい」「こんな曲をみんなで演奏してみたい」と、子どもたち自らが提案し、主体的に関われるような取組へと拡げていきたいと思います。

打ち鳴らせ！心に響け！

大阪府立中央聴覚支援学校
近友　順子

第３０回全国聾学校合奏コンクール開催おめでとうございます。今回応募するのは２回目となります。前回はじめて応募しましたが、残念ながら１次審査を突破することは叶いませんでしたが、聴覚障がい児にとって「音」とは何かを改めて考える機会となりました。太鼓サークルたつの子は、本校寄宿舎のサークル活動として発足３０年になります。きっかけは、成人聴覚障がい者の方々が和太鼓の演奏を生き生きと楽しく演奏する様子を見て感動し「ぜひ子どもたちに音楽を、そして和太鼓の響きを伝えたい。」という思いにかられ、活動を始めました。本校の創立９０周年記念集会(平成３年)に初めて演奏し、その後運動会や文化祭、区民まつりでも披露することができ、子どもたちにとっては音を楽しむとともに大きな自信に繋がっています。こうして毎年太鼓や民舞を披露する機会を持ち活動を続けてきました。結果、様々な舞台に立つことで、耳が聞こえなくても、きこえにくくても、音楽を楽しんでくれています。さらにろうあ者の文化にもふれるとともに繋がり、たくさんの方に知ってもらえる機会となっているものと確信しています。

本サークルの活動は子どもたちにとっての日々の練習は技術を磨くだけでなく、アイコンタクトで息を合わせ、気持ちを一つにして音を響かせ仲間の中で活動を通じて充実した生活を送っています。振り返ると当初練習を始めた頃はそう簡単には行きませんでした。子どもたちにリズムを教えるにはどういう方法がいいのか、やる気を引き出させるにはどうしたらいいのか、指導者側も試行錯誤の繰り返しでした。現在も試行錯誤は続いています。卒業後も子どもたちが社会の一員として働く以外の趣味や社会活動に参加するなど、育ち合える集団があってこそ、より良く生きたいという楽しく充実した生活があると考えます。

今回の演目は『ぶち合わせ太鼓』での応募です。運動会で披露し、保護者や地域の方々からたくさんの拍手をいただいた演目です。これからも聴覚障がい児・者の音楽を通じてクオリティオブライフ(ＱＯＬ)を拡げていきたいと思います。

音と音がピタリと重なったとき

岡山県立岡山聾学校
角田　直也

本校では、５・６年生が合同で木琴、電子ピアノなどを使い合奏の学習を行いました。一般的に聴覚障害を有する児童は、リズムやきれいな音色を意識して奏でることが苦手な傾向があると言われています。本校の児童も例外ではなく、苦手意識をもっていたり、何のために音を合わせるのか目的意識を見いだせていなかったりしました。

そこでまず、メヌエットのオーケストラの映像を提示して、いろんな楽器を演奏して音を合わせる様子を鑑賞しました。そして、合奏で使うそれぞれの楽器に触れて音を出してみることで、自分にとって聞きやすい音や心地よい音を基準に、練習する楽器を選びました。課題曲はラバースコンチェルトで、それぞれの児童の実態に合わせて楽譜の難易度を変えました。合奏の練習は授業の中頃に１５分程度行い、毎時間最後に音を合わせました。児童には、一拍目を特に意識するように指導し、音を合わせることを目標に取り組みしました。教師の指揮は、右手を二拍、左手を四拍のリズムで刻みました。また、重複障害の児童には、T2 が背中にリズムを刻む支援を行いました。

授業中や休み時間に練習を重ねることで、楽譜を見ずに弾けるようになる児童も増えてきて、指揮を見る余裕が出てきました。そうすることで一拍目に意識が向くようになりました。最初は、一曲弾き終わるタイミングもバラバラでした。しかし、ある時に同時に合奏が終わったことに対して、児童は驚きとともに音を合わせる楽しさや意味について理解し始めたようでした。バラバラだった一拍目も音が揃うようになり、音自体にも心地よい音とそうでない音に気付くようになっていました。

合奏の学習を通して、音楽はリズムを刻んで流れ、みんなでそのリズムを合わせると、きれいな音を出すことができる楽しさにも気付くことができました。

３０周年記念誌に寄せて

香川県立聾学校
西岡　真由美

全国聾学校合奏コンクール３０周年、誠におめでとうございます。

本校「響心太鼓」が、合奏コンクールに参加し始めて、はや２０数年になります。初めの頃は、小・中学部の２学部で参加しており、両チームともに賞をいただいたこともありました。文部科学大臣賞・金賞は５度もいただき、とても励みになっています。

この太鼓演奏を通して、生徒たちは多くのことを学んできました。難しいことに挑戦する意欲やくじけそうになった時に頑張る粘り強さ、厳しさにも負けない精神力、全員で一つの物を創り上げる素晴らしさ等々。

出場するかどうか、毎年まず職員で話し合います。中学生という多忙な生活の中、太鼓練習の時間が取れるのか、様々な意見が出ます。しかし、大変な思いをしてでも、その先に、それに勝る何倍もの感動があることを知っているから、最終的には、毎年参加することに決まります。中学部の生徒の多くが、卒業文集の中で「一番心に残っているもの」に合奏コンクールのことを書くのも、この感動が忘れられないからだと思います。

しかし、この感動に至るまで全て順調とはいきません。「合ってないよ！よく見て。」「違う違う、遅くなってる！」指揮者の檄が飛びます。「わからんのに…」「聞こえんから、無理や！」と、投げやりにもなります。そこを毎日の練習で乗り越え、全員の心が一つになると、あとは目標に向かって突き進むだけです。失敗しても手の豆がつぶれても、来る日も来る日も朝から晩まで、寄宿舎でも練習し、ついに本番。ビデオ撮影を終えた子どもたちは、とても清々しい顔をしています。

合奏練習は、本当にしんどいです。誰か一人でも弱音を吐くと、続けることができません。でも、妥協はしません。目指せ、金賞！

今日も音楽室に「響心太鼓」が響きます。

心を一つにして

福岡県立福岡聴覚特別支援学校
吉村　恵子

本校は、毎年中学部２年生が全国聾学校合奏コンクールに応募しています。応募を通して合奏の難しさと楽しさ、お互いに協力することの大切さを学ばせていますが、演奏する生徒たちの真剣な姿や過去のコンクール入賞結果は、下級生や小学部の児童にとっての大きな目標となっています。また、音楽室から聞こえる自主練習の音に先生方からも「今年も頑張っていますね。」と応援があります。

様々な聞こえの生徒達がリズムや速さを合わせて演奏できるように、演奏者は体を動かしながら拍を取る練習をしたり、指揮者は小節数と拍を表す方法を工夫したりしながら取り組んでいます。

また、年度によって生徒の数が大きく異なるため、その年度に合わせた合奏形態を工夫しています。

今年はホルストの「木星」の主題の１つをモチーフにし、アレンジされた「Jupiter」の合奏に４名で挑戦しました。シロフォンの８分音符のリズム取り、キーボードの両手演奏、ドラムの速さや音の大きさの調整にとても苦労しましたが、放課後も生徒たちが自主的に練習を繰り返し、形になってきました。他の生徒や先生の前でも緊張感を持ちながら胸を張って、演奏に集中できるようにもなり、壮大なメロディーをみんなの心を一つにして演奏することができました。

これからも中学部２年生の和を創り上げる大切な取組として、また幼稚部・小学部からの目標となれるように挑戦していきたいと思います。

編集後記

平成２９年度の審査委員会の際に、審査委員から「全国聾学校合奏コンクールが第３０回を迎えるにあたって何か記念事業を行ってはどうか」という声が上がりました。その後も継続して委員会の中で意見交換を行ってきました。「関係者が一堂に会して座談会を行ってはどうか」とか、「過去のビデオやDVDを編集して特別記念バージョンを作成したらどうか」等々、色々な企画案が出ましたが、最終的には関係者の様々な立場からのコンクールに寄せる思いを載せた、記念誌を発行しようということになりました。

振り返ってみるとこの合奏コンクールは、平成元年に始まり第３０回を迎えたわけですから、当協会の事業としては「聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」に続いて長期間にわたり開催されている歴史のある事業です。その歴史を「始まりの頃から」振り返る冒頭の鼎談、そしてその後に続く特別寄稿も各先生方の貴重な原稿をお寄せいただきました。各審査委員の先生方の思い、そしてコンクールに寄せる各校の願いについても指導に当たられた先生方からお忙しい中、原稿を頂きました。有難うございました。

なお、この記念誌のタイトル「世界に一つだけの楽譜」は、現在の審査委員長、尾崎正峰先生の原稿の中から採らせていただきました。

この記念誌により、３０年の歴史の中での、聴覚障害児にとっては厳しいと言われている聾学校における音楽指導への取り組みの姿を振り返り、どう繋げ、どう発展させていくかが浮き彫りにできれば、協会関係者として幸いです。

（事務局：審査委員　櫻井　　博）

世界に一つだけの楽譜

全国聾学校合奏コンクール　３０周年記念誌

発　行　　2019年3月31日

発行所　　公益財団法人 聴覚障害者教育福祉協会

〒170-0005　東京都豊島区南大塚3-43-11 福祉財団ビル5F

Tel 03-6907-2537　　Fax 03-6907-2915

印刷所　　合同印刷株式会社